

唱歌・童謡の今日的様相と課題
—保育者を対象とした質問紙調査をもとに—

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : The Current Status of the Japanese Children's Songs Genres "Shouka" and "Douyou"
—Based on the Analysis of the Questionnaire Survey to Teachers in a Center for Early Childhood Education and Care—

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第80号 抜刷

2020年1月

唱歌・童謡の今日的様相と課題 —保育者を対象とした質問紙調査をもとに—

羽根田 真 弓¹

Mayumi HANEDA : The Current Status of the Japanese Children's Songs Genres "Shouka" and "Douyou"
—Based on the Analysis of the Questionnaire Survey to Teachers in a Center for Early Childhood
Education and Care—

唱歌・童謡の誕生から140年が経過した今日、若い世代層の保育者によるこれら歌唱教材の認知に関する先行研究の追調査を実施した結果、若い年代層ほど認知されていないことが明らかとなった。さらに、すべての年代層の保育者に「継承意欲」があることを確認した。しかし、「継承の可能性」については年代層が高い保育者ほど悲観的に捉えていることが明らかとなった。

キーワード：唱歌 童謡 教材活用 継承意欲 継承の可能性 保育者

1. 問題の所在と目的

明治14年(1881)に文部省音楽取調掛編纂「小学唱歌集初編」が刊行されて以降、大正期の「赤い鳥童謡運動」¹⁾を経て、「唱歌」「童謡」が誕生した。

この「唱歌」や「童謡」に関して、白石(1989)²⁾は「唱歌」は根強い人気のある教材であると述べており、羽根田(2005)³⁾も保育現場における歌唱教材として活用されていることを報告している。しかし、太田他(2018)⁴⁾や平澤(2018)⁵⁾らは、「若い世代に行くほど童謡・唱歌を知らない」「若い保育者らがかつて当たり前のように歌われてきた童謡・唱歌を知らない」と述べており、若年層の保育者が唱歌や童謡をあまり知らないのではないかと指摘している。さらに平澤は次世代へ継承されないことは、伝統文化の消失であると危機感を募らせている⁶⁾。

若年層の保育者たちは、唱歌や童謡をどのように捉え、あるいはどのように認知しているのだろうか。保育現場の子どもたちは、これらの教材を歌っ

ているのだろうか。以上の問題意識のもと、鳥取県内の保育者を対象に若年層の保育者による認知度の低下に関する追調査を実施した。さらに、「唱歌」および「童謡」の教材としての保育現場における活用状況と保育者の「継承意欲」、「継承の可能性」の意識について質問紙調査を実施した。

なお、本調査における「唱歌」は、既述の「小学唱歌集初編」に含まれる唱歌から、文部省唱歌へ迎えるまでの言文一致唱歌もあえて「唱歌」として位置づけた。さらに文部省唱歌については、明治43年(1910)に発行された「尋常小学読本唱歌」から大正3年(1914)に発行された「尋常小学唱歌」六巻までとし、いわゆる教育唱歌⁷⁾とした。また、「童謡」はそれまでの学校唱歌ではなく、大正7年(1918)7月に鈴木三重吉が創刊した児童雑誌「赤い鳥」以降、昭和初期のレコード童謡までの大正時代の童謡とした。

2. 方法

(1) 調査対象者

鳥取県内すべての保育所144ヶ所、幼稚園16ヶ所

1 鳥取短期大学幼児教育保育学科

および認定こども園 40ヶ所, 合計 200ヶ所を対象に, 各園から異なる年代の保育者 3 名に回答の依頼をした。したがって, 対象者は 600 名の鳥取県内保育者である。回答者数は 435 名であり, 72.5%の回収率であった。

勤務先形態別の有効回答者数は, 保育所 304 人, 幼稚園 34 人, 認定こども園 94 人である。年代別の有効回答者数は, 20 代 108 人, 30 代 128 人, 40 代 117 人, 50 代 67 人, 60 代 12 人である。

(2) 調査の手続き

質問紙を対象園である 200ヶ所に郵送した。無記名の回答とし, 質問紙調査の目的は質問紙調査表紙に掲載した。また回答用紙の返送は各園ではなく, 個々による返送とした。なお, 本研究は鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会における承認を得て実施した(承認番号 2019-1)。調査実施時期は, 2019 年 7 月である。

質問項目は, 次の 5 項目である。

- 1) 現在, 唱歌・童謡を歌唱教材として活用しているか
- 2) どのような場面で唱歌・童謡を歌っているか
- 3) 提示の唱歌・童謡(33 曲)を知っているか否か
- 4) 唱歌・童謡を子どもたちに継承していきたいか
- 5) 唱歌・童謡は, 将来的に子どもたちによって歌い継がれていくと思うか

質問 1) と質問 2) では唱歌・童謡の「教材としての活用」, 質問 3) では「唱歌」および「童謡」の認知度, 質問 4) では唱歌・童謡の「継承意欲」, 質問 5) では唱歌・童謡の「継承の可能性」についての項目設定とした。質問 1), 質問 4), 質問 5) は 4 段階の尺度で回答を求めた。質問 2) は複数回答で回答を求め, 質問 3) では「唱歌」「童謡」合わせて 33 曲の題名と歌いだしを記載し, これらの歌を知っているか否かで回答を求めた。

3. 結果

項目別に結果をまとめる。

- 1) 現在, 唱歌・童謡を歌唱教材として活用しているか

リッカート尺度の 4 段階評価で回答を求めた結果, 平均値は 3.23 ± 0.67 であった。年代が高くなるほど平均値が低くなる傾向がみられたものの, 年代別による平均値の有意差はなかった。さらに, 園の形態別による有意差もなかった。

- 2) どのような場面で唱歌・童謡を歌っているか

複数回答を求めた結果, 「季節の歌として歌っている」の回答が 420 件, 「行事の歌として歌っている」の回答が 319 件, 「年間計画に導入している」の回答が 76 件, 「その他」は 41 件であった。「その他」の回答では, 午睡時の子守歌として歌っているという回答が多くみられ, さらには絵本に合わせて歌う, 高齢者との交流の場や発表会や誕生会, リズム活動で歌う, 日常的に生活の中で歌う, 子どもを集中させる場面, および植物や動物を子どもたちと共有したい場面で歌っているという記述が見られた。

季節の歌の教材として活用しているという回答の割合は全体の 96.6%であり, 圧倒的に高い。行事の歌として活用されている回答の割合は 73.3%であり, 年間計画に導入しているという回答の割合は 17.5%であった。

- 3) 提示の唱歌・童謡(33 曲)を知っているか否か

今回の質問紙調査における「唱歌」および「童謡」の定義を調査用紙の表紙に記載し, 合計 33 曲について知っているか否かの回答を求めた。これらの曲は, 全国大学音楽教育学会編著『明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌—唱歌童謡 140 年の歩み』⁸⁾から抽出し, さらに保育者養成校である鳥取短期大学幼児教育保育学科において筆者が担当する授業科目「音楽」の教材の中から選曲した。

図 1 は, 年代ごとの既知曲数の平均を表したものである。年代層が高いほど多くの曲を知っており, 年代層が低くなるほど明らかに低下している。すべ

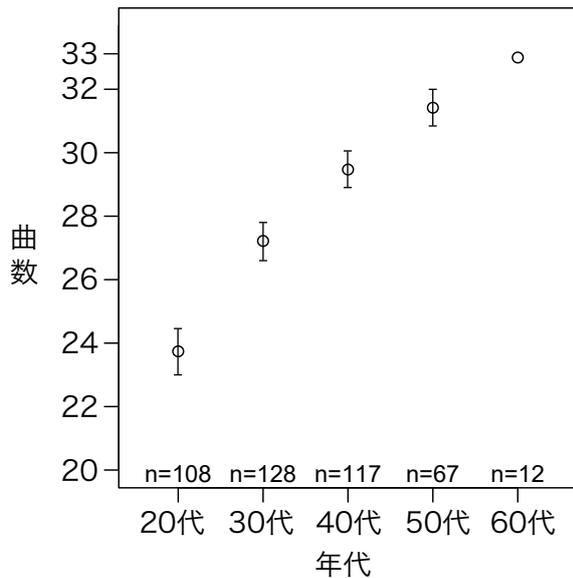


図1 年代ごとの既知曲数平均

ての年代の組み合わせにおいて有意差が見られた (Welch's t tests with Bonferroni-Holm adjustments : すべての年代の組み合わせ $p < .01$).

さらに、表1として、それぞれの曲の認知度の割合を一覧表に示す。100%の割合で認知されていたのは、「ちょうちょ」のみの1曲であった。一方、割合が一番低い歌は児童雑誌「赤い鳥」に童謡として最初に掲載された歌「かなりや」であり、26.7%である。文部省唱歌の「日の丸の旗」もおおよそ39.9%の割合であり、言文一致唱歌の「一寸法師」は52.5%、また童謡の「赤い鳥小鳥」は43.8%、「背くらべ」は55.1%の割合であった。

表2は、認知度が低かった上記の5曲について、年代別の人数比として表したものである。筆者が想像した以上に、20代と30代の認知度が低い。

また、図2はジャンルごとの認知度の割合を示したものである。aは「小学唱歌集初編」に含まれる「唱歌」、bは「言文一致唱歌」、cは「文部省唱歌」、そしてdが「童謡」である。「小学唱歌集初編」に含まれる「ちょうちょ」「見渡せば(むすんでひらいて)」は曲目数2曲ではあるが回答率は高く、言文一致唱歌と童謡のジャンルの回答率は文部省唱歌と比較すると低い。

表1 認知度の割合

番号	題名	認知度 (%)
1	ちょうちょ	100
2	みわたせば	98.4
3	金太郎	97.7
4	うさぎとかめ	99.5
5	だいこくさま	82.5
6	はなさかじじい	69.4
7	一寸法師	52.5
8	春が来た	99.5
9	虫の声	99.3
10	われは海の子	73.7
11	かたつむり	99.8
12	日の丸の旗	39.9
13	桃太郎	99.5
14	雪	99.5
15	紅葉	96.8
16	茶摘	88.0
17	春の小川	93.3
18	朧月夜	76.5
19	故郷	99.3
20	赤い鳥小鳥	43.8
21	かなりや	26.7
22	夕焼小焼	97.0
23	どんぐりころころ	99.5
24	てるてる坊主	92.6
25	証城寺の狸囃子	90.8
26	兎のダンス	65.4
27	揺籠のうた	82.5
28	七つの子	94.7
29	靴が鳴る	73.5
30	春よ来い	93.8
31	シャボン玉	99.5
32	アメフリ	95.9
33	背くらべ	55.1

表2 年代別の人数比

曲名	回答別	20代 (%) (N=108)	30代 (%) (N=128)	40代 (%) (N=117)	50代 (%) (N=67)	60代 (%) (N=12)
一寸法師	知らない	61.1	57.8	43.6	21.2	0
	知っている	38.9	42.2	56.4	78.8	100
日の丸の旗	知らない	86.1	75.8	49.6	18.2	0
	知っている	13.9	24.2	50.4	81.8	100
かなりや	知らない	90.7	82.8	71.8	40.9	0
	知っている	9.3	17.2	28.2	59.1	100
赤い鳥小鳥	知らない	87.0	64.8	44.4	19.7	0
	知っている	13.0	35.2	55.6	80.3	100
背くらべ	知らない	78.7	60.2	27.4	1.5	0
	知っている	21.3	39.8	72.6	98.5	100

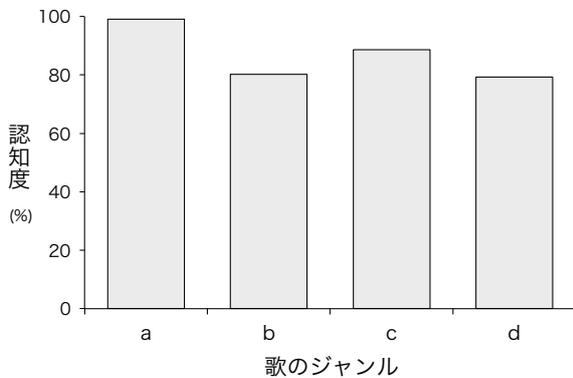


図2 ジャンルごとの認知度

あるが、年代層による有意差がある。したがって、「継承の可能性」については年代層による偏りがある。

表3 年代と継承意欲のクロス集計

	20代	30代	40代	50代	60代	合計
1a	0	1	2	3	1	7
1b	16	21	30	14	3	84
1c	52	72	60	31	3	218
1d	41	29	21	15	3	109
合計	109	123	113	63	10	418

注 表内の記号は以下のとおりである。
 1a = 全然思わない 1b = あまりそう思わない
 1c = やや思う 1d = おおいに思う

4) 唱歌・童謡を子どもたちに継承していきたいか
 リッカート尺度の4段階評価で回答を求めた結果、平均値は 3.62 ± 0.54 であった。年代別による平均値の有意差はなかった。さらに、園の形態別による有意差もなかった。

5) 唱歌・童謡は、将来的に子どもたちによって歌い継がれていくと思うか

リッカート尺度の4段階評価で回答を求めた結果、平均値は 3.03 ± 0.73 であった。年代ごとの平均値では、20代が 3.23 ± 0.69 、30代が 3.05 ± 0.66 、40代が 2.89 ± 0.72 、50代が 2.92 ± 0.81 、60代が 2.80 ± 1.03 であった。

年代別(5条件)と尺度(4条件)のクロス集計表(表3)を作成し、 χ^2 乗検定を行い、Cramerの連係数(Cramer's V)の算出をした結果、0.144であった($p < .05$)。関連の強さとしては、0.144では

さらに、質問1)の「教材としての活用」と質問4)の「継承意欲」のクロス集計表(表4)を作成し、 χ^2 乗検定を行い、Cramerの連係数(Cramer's V)

表4 教材としての活用と継承意欲のクロス集計

		教材としての活用				合計
		2a	2b	2c	2d	
継承意欲	3a	0	0	1	0	1
	3b	0	4	3	1	8
	3c	0	25	93	13	131
	3d	2	14	111	127	254
	合計	2	43	208	141	394

注 表内の記号は以下のとおりである。
 2a = 全然活用していない 2b = あまり活用していない
 2c = やや活用している 2d = 積極的に活用している
 3a = 継承する必要がない 3b = あまり必要がない
 3c = やや必要がある 3d = 是非継承したい

の算出をした結果、0.316 で有意であった ($p<.01$).

「教材としての活用」が高いほど「継承意欲」の評価が高くなっていることが明らかである。「継承意欲」では尺度「3」「4」が全体の98%を占めている。

質問4)の「継承意欲」と質問5)の「継承の可能性」においてもクロス集計表(表5)を作成し、 χ^2 二乗検定を行い、Cramerの連係数(Cramer's V)の算出をした結果、0.211 で有意であった ($p<.01$).

「継承意欲」が高いほど「継承の可能性」をより高く評価しているということが明らかである。

表5 継承意欲と継承の可能性のクロス集計

		継承意欲				合計
		3a	3b	3c	3d	
継承 の 可 能 性	1a	0	0	1	5	6
	1b	0	3	44	32	79
	1c	1	4	74	134	213
	1d	0	1	17	87	105
	合計	1	8	136	258	403

注 表内の記号は以下のとおりである。
 3a = 継承する必要がない 3b = あまり必要がない
 3c = やや必要がある 3d = 是非継承したい
 1a = 全然思わない 1b = あまりそう思わない
 1c = やや思う 1d = おおいに思う

質問5)の「継承の可能性」と質問1)の「教材としての活用」においてもクロス集計表(表6)を作成し、 χ^2 二乗検定を行い、Cramerの連係数(Cramer's V)の算出をした結果、0.234 で有意で

表6 教材としての活用と継承の可能性のクロス集計

		教材としての活用				合計
		2a	2b	2c	2d	
継承 の 可 能 性	1a	2	1	3	1	7
	1b	1	19	45	15	80
	1c	1	16	126	68	211
	1d	0	8	37	59	104
	合計	4	44	211	143	402

注 表内の記号は以下のとおりである。
 2a = 全然活用していない 2b = あまり活用していない
 2c = やや活用している 2d = 積極的に活用している
 1a = 全然思わない 1b = あまりそう思わない
 1c = やや思う 1d = おおいに思う

あった ($p<.01$).

「教材としての活用」が高いほど「継承の可能性」を評価していることが読み取れる。

4. 考察

本研究では、若年層の保育者に「唱歌」「童謡」がどのように捉えられているのか、そして保育者のこれら教材の継承意欲、子どもたちによってこれらの教材が歌い継がれていくかについて保育者の認識を明らかにすることを目的として、調査を行った。

その結果、保育現場において「唱歌」「童謡」は、多くの場面で扱われていた。しかし、曲によっては、若い年代層の保育者にあまり知られていない曲があった。継承意欲については、年代間の偏りなく示されていた。そして、子どもたちに歌い継がれていくかどうかの可能性については、年代層の高い保育者ほど悲観的に捉えていることが明らかになった。

今後、これらの歌唱教材をどのように扱っていけばよいのか、まず、教材としての意義について考察する。

鳥取県内で実施した本調査の結果、「唱歌」「童謡」は保育現場において教材活用されていた。そして、これらの教材は圧倒的に「季節の歌」として扱われており、同時に「行事の歌」として活用されていた。この実態について、白石(1989)⁹⁾と羽根田(2005)¹⁰⁾も同様に報告している。つまり、これらの教材は季節および行事の歌として保育現場で一般的に活用されていることが現状と思われる。この現状について、今回の調査で年間計画の有無に関する回答率が低い結果から、「唱歌」「童謡」としての明確な位置づけがあるのではなく、季節的な要素が多く含まれていたり、行事を題材にした歌が「唱歌」や「童謡」であったことが推測できる。つまり、「唱歌」や「童謡」として意識した教材設定ではなく、季節や行事内容を優先した教材設定になっていることが考えられる。保育現場における教材選択は保育者の嗜好による傾向にあることも報告されてお

り¹¹⁾、保育者がこれらの教材をどのように捉えているのか、さらには「唱歌」「童謡」を継承することの明確な目的意識のもとに教材活用されているのか、保育者の認識について今後明らかにする必要がある。

次に、若い年代層の保育者による「唱歌」および「童謡」の認知度が低い実態について考察する。

今回の調査において、世代間の認知度の相違が明らかになり、若い世代になるにしたがって認知されていない曲があった。この実態は、保育者を目指す学生たちのこれらの教材への認識が希薄になっていることと関連しているのではなからうか。保育学生たちは、歌唱への関心はあるものの歌唱教材の歴史の変遷に関する興味が低く、歌唱教材の成立過程さらには教材の分類ができない傾向が見られるのである。「唱歌」と「童謡」の区別もできないことが現状であり、歌唱教材の認知度と密接に関連していると考えられる。

保育者養成課程では、音楽関連科目は「保育内容の理解と方法」もしくは「領域及び保育内容の指導法に関する科目」に区分されるが、歌唱技能や伴奏技能ではなく、これらの教材を理解することが重要である。教材理解することによって、教材活用され、さらには「継承」することの意味を考えることができる。このように、若い世代層の保育者が「唱歌」「童謡」をあまり知らないという実態においては、保育者養成課程の課題として受けとめなければならない。

最後に、これらの教材が子どもたちに歌い継がれていくのか、この可能性について保育者がどのように捉えているのか考察する。

Cramerの連関係数において大きくはないものの年代間に有意な関連が認められた。年代層が高くなるにしたがって「継承の可能性」の評価が低く示されており、このことは年代層が高い保育者ほどこれらの教材の「継承の可能性」を悲観的に捉えていると考えられる。さらに、「世代間の継承が途絶えがち」「核家族でもあり、若い人ほど唱歌、童謡を知

らない」「保護者の世代も知らない」「保育者自身も知らなくなる」「若い世代はこれらの歌が必要ではないと思っている」「新しい歌や楽しい歌、歌いやすく覚えやすい歌が増加傾向にある」等の自由記述からも、若い世代が「唱歌」「童謡」からはなれていくことを危惧していることが示されている。こうした年代層の高い保育者による意識は、保育現場からの問題提起として受けとめることができる。

今回、「唱歌」「童謡」は保育現場において教材として扱われていたことは確認できた。しかし、活用されているもののこれら歌唱教材を継承するという目的意識が伴っているか否かについては明らかにすることができなかった。継承意欲については、年代間に関係なく示されていたにもかかわらず若い世代層の保育者はこれらの教材をそれほど認知していない実態が明らかになった。加えて継承することの可能性についての意識も若い世代の保育者ほど高く示されていた。認知していない曲があるにもかかわらず、若い年代層の保育者に継承意欲や継承することができるという意識については今後明らかにしていきたい。

子どもたちが「唱歌」「童謡」を認知する場所は保育現場であると平澤(2018)¹²⁾も述べているように、これらの教材が子どもたちによって歌い継がれていくか否かは、保育者の役割が重要であることは述べるまでもない。今回の調査で明らかとなった保育者による「継承意欲」は、言い換えれば、継承しなければならないという保育現場からの意思表示として受けとめられる。そして保育現場における教材活用の目的意識および若年層の認知度の課題は、保育者養成校としての課題でもある。保育者養成校としてもこれらの「唱歌」「童謡」をどのように捉えていくのか議論が求められる。

謝辞

本調査を実施するにあたり、鳥取県内の保育現場の先生方にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 長田暁二『童謡歌手からみた日本童謡史』, 大月書店, 1994
- 2) 白石昌子「幼児の歌唱教材選択に関する一視点」, 『福島大学教育学部論集 教育・心理部門』第46号(1989), pp. 17-32. および白石昌子「幼児の歌唱教材に関する一考察」, 『日本保育学会大会研究論文集』42(1989), pp. 578-579.
- 3) 羽根田真弓「幼稚園における歌唱教材と指導法について」, 『鳥取短期大学研究紀要』第52号(2005), pp. 21-30.
- 4) 太田央子・山中文・渡邊康「保育活動における童謡・唱歌の機能」, 『椋山女学園大学教育学部紀要』第11号(2018), pp. 97-102.
- 5) 平澤節子「童謡・唱歌を歌い継ぐ音楽教育のあり方について—幼児期から高等教育までの展
- 望—」, 『児童文化研究所所報』第40巻(2018), p. 61.
- 6) 前掲5), p. 61.
- 7) 鷺尾勝「文部省唱歌の性格」, 国立音楽大学楽理学科研究室編『有馬大五郎先生八十歳記念論文集』, 国立音楽大学, 1980, pp. 487-505.
- 8) 全国大学音楽教育学会『明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌—唱歌童謡140年の歩み—』, 音楽之友社, 2013.
- 9) 前掲2), p. 25.
- 10) 前掲3), p. 24.
- 11) 本野洋子・岡村弘・原浩美・赤塚太郎「保育士の好きな“子どもの歌”と歌わせたい“子どもの歌”」, 『日本音楽教育学会第49回大会プログラム』(2018), p. 82.
- 12) 前掲5), p. 65.